

主 文

原判決を破棄する。  
被告人を罰金五千元に処する。  
もし、右罰金を完納することができないときは、金二百円を一日に換算した期間被告人を労役場に留置する。但し、この裁判確定の日から一年間右刑の執行を猶予する。

原审並びに当審における訴訟費用は全部被告人の負担とする。

理 由

本件控訴の趣意は、原审検察官笹原元提出の控訴趣意書記載のとおりであり、弁護人浦田仙造の答弁は同弁護人提出の答弁書記載のとおりである。

一、 本件公訴事実の要旨は、「被告人は、医師であつて佐賀県東松浦郡 a 村 b に A 病院を開設して医業に従事していたものであるが、昭和二五年七月二九日かねて脊髄カリエスのため治療に来ていた B がぶどう糖カルシウム五本入一箱を持参してこれが注射方を依頼したので、医師たるものは、その箱の状態、注射薬入手の状況、注射液の溷濁変色の有無等詳細に調査し、万が一アンプルにレッテルのないものがあるときは、検定を受けてその真偽を確かめた後注射する等事故を未然に防止すべき業務上の注射義務があるのににもかかわらず、右注意義務を怠り、不注意にも右箱は相当古びており、封緘紙は破つてあつて、中のアンプル五本のうち三本はレッテルがなかつたのに B に対し入手その他につき詳細な調査をせず、溷濁変色の有無を調べたのみで大事なものと軽信して検定も受けなかつたため、レッテルのないアンプルが点眼薬カルパノールヒョリンクロットであつたのに気づかず、同月三十一日午前一〇時頃右病院で右レッテルのないカルパノールヒョリンクロット三本中一本を右 B の左腕静脈に注射したため、因つて右注射による呼吸まひにより同一〇時一〇分頃右病院において同女を死亡するに至らしめたものである、」というのであり、また、原判決が所論のような事実を認定し、被告人に過失のない所以を説示し、結局公訴事實は犯罪の証明がないことに帰するものとして無罪の言渡をしたことは、いずれも所論のとおりである。

二、 原判決挙示の（一）ないし（六）の証拠並びに当審において取り調べた証拠を総合すれば、原判決も認定するように、本件公訴事実のうち、

（い）、 被告人は医師であつて、昭和二四年八月以来佐賀県東松浦郡 a 村 b において病院を営み医業に従事していたものであるが、昭和二五年七月二九日かねて被告人のもとに通院し結核性脊髄カリエスの治療を受けていた B が、注射剤ぶどう糖カルシウムと思料されるアンプル一本二〇cc 入のもの五本在中の紙函一個を同病院診療室に持参して被告人に示し、これが注射方を求めたこと、

（ろ）、 右の紙函の状況は、その外表に C 株式会社製ぶどう糖カルシウムの標示があつたが、うすい埃の附着が見られる程度に相当古びており、封緘紙もすでに破つて封が切つてあつたこと、

（は）、 紙函在中のアンプル五本のうち二本には、紙函外表の標示と一致するぶどう糖カルシウムのレッテルが貼付してあつたが残り三本のアンプルには全くレッテルがなく、剥げ落ちたレッテルも見当らず、その入手先を尋ねると B は、「自宅で夫 G から受取つて来た、夫は、『これは、お前の病気に効く注射薬であるから注射してもらえ。』といつて渡してくれた。」旨を答えたこと、

（に）、 被告人においてアンプルを振蕩透視して点検したところ、アンプル五本の注射液には、いずれも溷濁、変色、沈澱物等がなく、すべて無色透明であり、アンプルの形状等もほぼ同一で別段異常の認むべきものがなかつたこと、

（ほ）、 被告人はレッテルのないアンプルの薬液も、レッテルのある薬液同様ぶどう糖カルシウムであると確信し、B の依頼に応じて注射方を承諾し、同月三十一日午前一〇時頃前記病院診療室において、レッテルのないアンプル三本のうちの一本の薬液を B の右腕正中静脈に注射したところ、はからずもそれは点眼用の劇薬カルピノール一号であつたため、約二cc の注射により即座に反応を生じ、被告人においてただちに注射の続行を中止し、応急措置を講じたがついにおよばず約一〇分にして呼吸まひにより、B をして同所において死亡するに至らしめたこと、

等の事実を認定することができる。

〈要旨〉三、 およそ医師が患者に静脈注射を施す場合、もし薬液の品質種類の判別を誤まるときは、人の生命身体に</要旨>不測の障害を招来する危険のあることは言をまたないところであるから、右のような注射を施すにあつては、薬液の判別にいささかも過誤のないことを期し、もしいやしくもこれが明白的確な判別を下し難い事情の存する場合には、すべからず注射を避止し、もつて危険の発生を未

然に防止すべきは、医師の業務上当然の注意義務というべく、アンプルに貼付される正規のレッテルは、通常在中薬液の品質種類を証明するものであるから、特段の理由がない限り、レッテルの確認は薬液の検定による確認と同一視して然るべきであるが、もしアンプルにレッテルの貼付がない場合には、薬液の検定もしくはこれと同一視しうべき格別の事情が存しない以上、薬液の品質種類につき明白的確な認識をうるに由なく、これが判別を誤まるおそれなしとしないのであるから、医師としては、かかる場合すべからず注射を避止すべきである。

四、 本件についてこれを見るに、鑑定人医師Dの作成にかかる鑑定書、厚生省薬務局監視課長の通牒写、佐賀県衛生部の通牒写その他の証拠によれば、Bに注射された薬液は、カルバミノイルヒヨリンクロリツトの製剤たる劇薬カルピノール一号で、点眼用として二〇ccアンプル入で市販されているものであるところ、二〇ccの注射剤と同様の透明なアンプルに容れてあつて、カルシウム注射剤と紛らわしく、これが誤用による死亡事故が佐賀県内において昭和二五年中本件以前に二件発生していることが明かである。そして、検察官の面前における被告人の供述調書、Bに対するカルテの訳文、当審証人E、同Fの各供述によれば、Bは被告人の経営にかかる前記病院から徒歩約一〇分の近距離に住む農家の主婦で正直者であり、昭和二四年八月以来被告人の診療を受け、被告人は、Bの実家及び婚家の家人に診療を行つたこともあつて、かねて、Bを信頼していた事実、並びにBは、本件の二週間ほど前、昭和二五年七月一四日、開封された紙函に入れてあるミノファージェンA二cc入九本の注射剤を持参し、被告人に対し本件同様夫にすすめられたからとて注射方を依頼したので、被告人は同日から同月二五日までの間に右九本全部の注射を施したが何らの異常も生じなかつた事実を認めるに足り、被告人は、これらの事情と、本件薬液を点検してその無色透明で別段異常のないことを確かめることができたこと、並びにそのうち二本にはぶどう糖カルシウムのレッテルが貼つてあり、その紙函にもぶどう糖カルシウムの標示が施こされていたこと等のため、本件薬液にレッテルが貼つてない事実は知っていたが、それがBのことばのとおり、ぶどう糖カルシウムであると信じ、同女の依頼に応じて注射を施したものであつて、被告人は、本件所為につき過失の責を負うべき限りでない旨を主張する。

五、 しかし、右のミノファージェン注射剤には、すべてレッテルが貼つてあつたのであり、アンプルにレッテルの貼つてない注射液を被告人が施用した事例は、本件以外には絶えてなかつたことは、被告人も原審公判において自認しているところであつて、右のミノファージェンを注射してBの身体に異常が生じなかつたという事実は、レッテルの貼つてない注射液の施用による危険の不予見を正当化する事由とはなし難い。

また、ぶどう糖カルシウムもカルピノール一号も、共に無色透明の薬液であるから、振蕩透視の結果無色透明であることを確認しただけでは、薬液の品質種類の判別に欠くところがなかつたということとはできない。

被告人主張の前記事情は、患者Bの言に格別の疑問を抱くに至らなかつた事由としては、これを肯認するに足りるが、患者Bは薬学の知識に乏しい片田舎の農家の一主婦であつてかかる患者の言は、レッテルのない薬液の品質種類を判別する根拠とするには、十分でない。

本件のような場合、Bの持参した薬液のうちに、カルピノール一号のような劇薬が混在していることを予見することは容易でなかつたとしても、本件薬液には、そのアンプルに現にレッテルの貼付がなく、その品質種類の判別につき、拠るべき明白的確な資料を欠如しているのであるから、良識をそなえた通常一般の医師である限り、品質種類の確実でない薬液の注射による不慮の障害の可能性を蓋然的に予見することの必ずしも不能でないことは、健全な常識に照らして明白であるというべく、したがつて、前記説示のとおり、その性能の確認されないかかる薬液の注射は、たとえ、患者の依頼があつても、医師としてはこれを拒絶すべき業務上の注意義務があると解するのが相当である。

被告人の本件所為は、レッテルのない薬液につき、検定もしくは検定と同一視しうべき格別の事情があつたものとは認められないのであるから、すべからず注射を拒絶すべきであつたのにかかわらず、主としてBの言を信頼し、薬液の無色透明、アンプルの形状等を確認めたのみで、たやすくぶどう糖カルシウムであると轻信し、注射を施した点において過失の責を免かれまいといわざるをえない。原判決がその摘示するような事実を認定しながら、被告人に過失なしとしたのは、医師の業務上の注意義務に関する法則を誤まり、ひいて事実を誤認したものというのほかに、論旨は結局理由があり、原判決は、破棄を免れない。

よつて、刑訴第三九七条により原判決を破棄し、刑訴第四〇〇条但書に従い本質について更に判決する。

(罪となるべき事実)

被告人は医師であつて、昭和二四年八月以来佐賀県東松浦郡 a 村 b において病院を営み医業に従事していたものであるが、昭和二五年七月二九日かねて被吉人のもとに通院し結核性脊髄カリエスの治療を受けていたBが、注射剤ぶどう糖カルシウムと思料されるアンプル一本二〇cc入のもの五本在中の紙函一個を同病院診療室に持参しこれが注射方を求めたので、被告人においてこれを受取り点検したところ、右の紙函には、C株式会社ぶどう糖カルシウムの標示があつたがうすい埃が附着し、同函は相当古びており、封緘紙もすでに破つて封が切つてあり、左中のアンプル五本のうち二本にはぶどう糖カルシウムのレッテルが貼付してあつたが、残り三本にはレッテルがなく、剥げ落ちたレッテルも見当らず、その入手先につきBは、夫Gのすすめにより自宅で夫より受取つた旨を申出たのであつた。およそ医師が患者に静脈注射を施す場合、もし薬液の品質種類の判別を誤まるときは、人の生命身体に不測の障害を招来する危険のあることは、言をまたないところであるから、右のような注射を施すにあたつては、薬液の判別にいささかも過誤のないことを期し、もしいやしくもこれが明白的確な判別を下し難い事情の存する場合には、すべからず注射を避止し、もつて危険の発生を未然に防止すべき業務上当然の注意義務があるにかかわらず、被告人は、これが注意義務を怠り、アンプル五本の注射液はいずれも無色透明で、溷濁、変色、沈澱物の存しないことを確かめたのみで、主としてBの言を信頼し、不注意にもレッテルのない薬液が劇薬カルピノール一号であることに気づかず、レッテルのある薬液同様ぶどう糖カルシウムであると轻信し、Bの依頼に応じ、同月三一日午前一〇時頃前記診療室において同薬液をBの右腕静脈に注射したため、約一〇分にして呼吸まひによりBを同所において死亡するに至らしめたものである。

(証拠の標目)

- 一、 原審公判における被告人の供述
- 一、 電話聴取書(変死届)
- 一、 Eの検察官に対する供述調書
- 一、 医師Dの鑑定書
- 一、 厚生省薬務局監視課長の通牒写、佐賀県衛生部の通牒写
- 一、 原審並びに当審における証人E、鑑定人H、同Iの各供述
- 一、 被告人の司法警察員及検察官に対する各供述

(法令の適用)

刑法第二二一条前段(罰金刑選択)、罰金等臨時措置法第二条第三条、刑法第一八条、刑法第二五条第一項、刑訴第一八一条第一項

以上の理由により主文のとおり判決する。

(裁判長裁判官 下川久市 裁判官 柳原幸雄 裁判官 岡林次郎)